

なんどか治したい

吃音矯正所にすぎる人々

どの国や地域にも1%ほどはいるといわれる吃音者。日本でも一〇〇万人を超える人たちが人知れず想像もできない悩みを抱いている。その人たちに「治ります」「治します」と働きかける吃音矯正所がある。はたして、矯正所で吃音は治るものなのか。

近藤雄生

対するマリリンの人知れぬ不安があったのかもしれない。

吃音を取り巻く環境

マリリン・モンローには知られざる一つの癖があった。彼女が私たちの中に残っていたイメージからは想像しにくい癖——それは、「どもる」ということである。

「……慣れ親しんだ事柄を話しているせい、か、ノーマ・ジーン（マリリンの本名）筆者注」の口調が自信に満ち、流暢になってきた。その間はつまることもなかったが、時折言葉がつまる癖は滞在中ずっと続いていた。……」

これは、マリリンとは異父の姉であるバーニス・ベイカー・ミラクル、モナ・ラエ・ミラクル共著「マリリン・モンロー わが妹マリリン」(大沢満里子訳)の中の一節である。周囲の人が後にも思い出すほどである場合、本人はともなうことをかなり苦にしていた可能性は十分にある。地下鉄の風に吹き上げられる白いスカートをはしゃぎながら押さえる天真爛漫な姿の裏にも、ともなうことに

程度の差こそあれ、どもり、すなわち吃音を抱える人はどの国や地域にも1%程度いるといわれる。たとえば日本には一〇〇万人以上いるということになる。それだけ数が多く、また、ヒポクラテスやアリストテレスもそれについて書いている(フレデリック・P・マレー「吃音の克服」による)ほど古くから研究されているにもかかわらず、その原因はいまだにはつきりしない。

それが脳などの器質的な欠陥なのか、神経症の一種なのか、それとも周囲の環境によって身につけてしまった癖のようなものなのか。いくつかの説があるが、いずれも仮説の域を出ない。吃音の原因は一様ではなく、これらが複合したものだとする見方が現在もっとも有力だ。

どもり方は人によって程度が異なるばかりでなく、症状についても大きな幅がある。「あ、あ、あの……」というような連発型と、「……あの」のように話し始めの文字でつまる難発型の二つに大きく分けられる。一般に「どもり」というと連発型の印象が強いが、実は難発型の方が症状としては重く、人数も多いといわれている。

そして各々の生活環境によって、名前が言えない、特定の挨拶だけができない、電話で話せない、などさまざまな状況が生まれる。それは決してただの不便さだけに留まらず、就職ができない、人に会うのが怖くなるなど一見思いもよらない大きくかつ多様な問題へと発展する。

なんらかの方法で改善できた人や、自然に「どもり」が消えていく人も確かにいるが、これといった治療法が分からない現在、吃音は治らないと考える人が多い。自らも吃音で悩

み苦しんだ過去を持ち、これまで多くの吃音者やその家族への相談活動に取り組んできた伊藤伸二(日本吃音臨床研究会代表)は、「吃音は治さうと思つて治るものではない。重い人ほど、安易な矯正法などを試すのではなく、吃音との付き合い方を考えなくてはならない」と語る。また、吃音を扱う医療機関はほとんどない。しかし一方、なんと少しでも治したいと思う人たちがいる。そして、それに呼応するように「治してあげます」という人たちがいる。

矯正所という存在

「矯正所なんてどこもいいかげんだと思いますよ。……ほ、ほ、ほくは今まで五つぐらい矯正所に行きましたけど、どこもだめでした。……で、治らなければ「君の努力が足りない」って、い、言われてしまうんです」

長崎から東京に来ていた二二歳のJがそう語った。幼稚園のころに、はじめをきっかけにどもりだして以来、彼はずっと重い吃音に悩まされている。小、中学校を通じて吃音はひと



くなり、それがもとで高校は半年で中退した。そして今も吃音が彼の生活を縛っている。そんな状態をなんとかしたいという強い思いで、民間の矯正所に通ってきた。

発声練習、腹式呼吸をして話す訓練、吃音者同士での自己紹介の練習など、いろいろな矯正所の方法を試みたが、どれもJを吃音から解放できなかった。ただ大量の時間とお金を失ったこれまでの経験が、「どこもいいかげんだ」という思いを抱かせた。

しかしこの日、彼は新たな矯正所の存在を知ってこう言った。

「こ、ここの矯正所に……いい、行ってみようかと思ってるんです。もしかしたら……、と思ってる……」

それは、千葉県松戸市の「山口・吃音クリニック研究所」だった。開業者の山口徳郎は、「吃音の原因をついに解明した」(注1)と主張し、吃音者には脳自体に障害があるとすると、その脳の障害に心の変化が加わったとき、吃音が生じるのだという。そして、吃音を矯正する方法として、「発声練習を繰り返すこと」と「場数を踏むこと」を掲げている。

Jにはまたここに賭けてみたいという気持ちがあるようだった。吃音者にとって矯正所の存在はそれほど無視できないものなのだ。

矯正所の指導者は、たいていは言語の専門家でも医者でもない。主に自ら吃音を克服したという人が、そ

の経験をもとに独自の理論と矯正法を掲げているのであり、吃音に対する考え方や矯正法はそれぞれ異なる。山口・吃音クリニック研究所のように吃音は脳の障害だと主張するところがある一方、障害ではなく単なる癖や心の問題だとするところもある。

たとえば、東京の「スギ吃音クリニック」は、「悪い発語リズムの癖」(注2)だとする。だから《乱れた発語リズムを正しくする事で吃音は直る》のだという。

だが、どの矯正所にも共通するのは、科学的根拠が不明瞭だということである。山口・吃音クリニック研究所も、脳の問題だと言い切るものの、科学的検証は全くされていない。その点について、山口徳郎はこう反論する。

「科学的な検証がないからだめといっていたら、いつまでたっても矯正法なんてできない。結局、実際に吃音を克服した人から学ぶしかないんです」

しかし、では実際に彼の矯正法を試した人たちはどの程度吃音が改善されたのかを聞くと、それは山口自身もよく分かっていないようだった。そして「根気がない人はだめ」で、「改善できるかは本人の努力次第」なのだという。彼の理論が正しいのかは実際の指導を通じて確認できていない。

また、吃音は《悪い癖》だとするスギ吃音クリニックに電話でその根拠

を尋ねたところ、「うちは金をとって人に教えているから、詳しくは話せません」と説明を拒否された。再び電話をしたときには「あなたに話すことはありません」と突然電話を切られてしまった。

矯正に四〇万円？

取材を続ける中で、何人もの吃音者たちからその名を聞くことになった一つの矯正所がある。

《隔膜バンドで解決》という広告を雑誌や新聞でマメに出しているせいか、知名度が高く、Jも六年前にここで通信指導を受けた。だが苦い思い出ばかりが残っている。

「二〇万ぐらい払って、矯正器具みたいなのを……か、買って。でも全然効果はありませんでした。い、い、今でも思い出すとあ、……あ、頭にきますよ。金ばかりかかってしまっただけ」

そんな感想を持ったのはJだけではない。

「通っていましたが、私は改善されませんでした。(中略)すべてが怪しいと思え、精神的苦痛がひどく、数回で通うのを辞めました」(インターネットの掲示板での記述から)

実際にここの指導を受けた結果、このように不信感を抱いたり効果がなかったと訴える声を、直接会って、またはメールやインターネットの掲示板を通じて、J以外にも五人ほどから聞いた。

驚異の矯正率!!
特許庁承認(登)

案内

体内エネルギー
緊張
腹圧



中央興人院の「案内書」には、実用新案の登録番号とともに「特許に基づく生体工学療法!!」の文字がある。手前の単行本は「これなら治るともり・赤面・あがり症・自律神経失調症」と「自分でできる」(ともり・赤面)矯正テクニック(いずれも須郷昭著・現代書林)。

逆の声は、「少しだけ改善したように思えます。(中略)しかし、自己紹介や電話の応対は全くというほど変わりませんでした」という掲示板の書き込みを一つ見つけることができただけだった。

その矯正所、「中央興人院(中央クリニック研究所)」の開業者である須郷昭は、その著書によれば、吃音を身体面から《力学的に研究》し、自ら《生体工学理論》と呼ぶ吃音矯正法と《隔膜バンド》などの矯正用具を《開発》したという。

だが彼の「工学理論」を読んで、驚いた。須郷が工学というものを全く理解していないことがその記述から一目瞭然なのだ(注3)。また「工学」「力学」という言葉を使いながらも数式は一つもない。その点を問いただされると、須郷の代わりに講師であるという人物が応対し、「数式による説明は訓練に来た人には教えて

「理論についての数式的な説明なんて全く、あ、ありませんでしたよ。説明がないというより、理論自体がないんでしょうね」

また、「隔膜バンド」というのは、太めのゴムで作った二つの環からなる非常に単純なものだが、所定の訓練を終えたあと、これを胸部に一定期間着用すると吃音矯正に効果があると中央興人院は言う。須郷はこれらの《吃音矯正補助具》を一九九八年に実用新案登録したことを根拠に、《理論》が《特許庁承認》、《吃音の治療に絶大な効果があることが実証され、公認されました」と案内書に書いている。だが、実用新案の登録というものは、《理論》の内容などとは関係のない形式的な要件を満たすだけでされるものであり、その《理論》自体を特許庁が認めたわけでは全くない。

さらに、九九年の彼の著作には、《たしかに理論と効果で特許獲得！》とまで書いてあるが、特許は出願・審査の結果、九八年に拒絶査定を受けているのだ。

佐々は、その《隔膜バンド》について、こう言っていた。

「効果があるわけじゃないじゃないですか。……本当にはかばかしくなりません。結局こんなもの使う気にはなれ

ませんでした。……こ、これがほしくて最後まで通ったのですが、実物を見てがっかりしましたよ。こんなもののために三九万円も払ってしまったのかと……」

《隔膜バンド》の実物は、訓練の最終日に初めて見せられたという。

ちなみに案内書によれば指導料は、《隔膜バンド》などの器具と指導書一式と《有効期限一年に限り自由》に質問する権利が得られる《通信指導》で二二万円、一回一時間程度の直接指導を六回受けられる《実地指導》で四二万円（一括で払えば三九万円）である。

ところで、この方法は実際に効果はあるのか。中央興人院には何度問い合わせても、須郷は電話にもファクスでの質問にも応じないので、仕方なくいつも電話に対応する女性に聞いたところ、「訓練を受けた人の改善具合を確認できるのは自己申告のアンケートだけ」だという。訓練終了時に、本人に感覚で「〇〇%くらい改善した」と書いてもらったものだ。しかし、訓練後のフォローは全くしておらず、その後どうなったかは分からない。

その点については、「訓練は継続の必要があり、その後は本人の努力次第だから」という。ちなみに、二〇〇二年の著作では、「三〇%以上改善した」と書いた人が多くいたことを理由に、その効果を主張しているが、前出の佐々孝男は、訓練終了後に須郷に「君は三〇%程度の改善だ」と言われたと記憶している（アンケートには一〇%程度と書いた）。すなわち、あれだけ不満を抱えている人が、須郷にとっては矯正効果ありのように見えていると考えられる。

また、著作の中にある《体験者たちの喜びの声》も、その女性によれば、「先生（須郷）が特に印象的だった人を選んで、アンケートと先生の話をもとにライターさんが肉付けして書いている」のだという。

この矯正所は七七年に創業して以来、二五年以上も続いている。そして今も月に五人ほど新しい人がやってくるという。それは私にある種の衝撃を与えた。なぜ四〇万円もの金を彼らは払ってしまつたのか。それは、吃音を治したいと強く願う人が多いからに違いない。だが、それだけのことなのだろうか。

そんな思いを抱いているとき、私のもとに一通のメールが届いた。インターネットの掲示板での私の情報提供のお願いに対して、数人から寄せられた中央興人院に対する非難の書き込みを見た、関西に住む二九歳の女性からのものだった。

それぞれの思い

そこには、「私にとってクリニックは神様みたいな存在だったんです」という言葉が書かれていた。なぜそんなに非難を受けるのか分からない。自分はクリニック（中央興人院のこ

中央興人院での6カ月の訓練終了後に使用する「隔膜バンド」。前ページの書籍にある装着手順で着けてみたところ。



と）に対して納得のいくものを感じて通い続けたのに……、という思いを彼女はメールに綴っていた。非難の声ばかりではないかもしれないと思っただけのもの、実際にそんなメールが届いたのは意外だった。この女性にそれだけのことを思わせる何かが、この矯正所にもあったのだ。私はとにかく自分の調べた事実を伝えようと、すぐに返事を書き始めた。それは彼女の気持ちに対する私自身の抵抗でもあったような気がする。

だがそのうちに、ふと手が止まった。勝手にそんなことを書いて彼女に余計な心配をさせる権利が自分にあるのだろうか、と。私が調べたことなど、知りたくないのかもしれない。結局、いくつか調べたことがあるので知りたければ伝えます、とだけ書くにとどめた。そしてメールを送ったその日のうちに、返事が来た。「……自分で選んで受けて今も続けようとする訳です。そのやる気を失わせる気持ちにさせる物ならば正直見たくも聞きたくもありません」

という言葉が、その中にはあった。中学時代から吃音に悩まされている。だがあるとき、偶然立ち読みした本で中央興人院のことを知り、そこにはこれまでの悩みの答えがずばり書いてあると感じ、迷いはあつたがとりあえず《通信指導》を受け始めた。そしてその後《実地指導》へと切り替え、月に一度のペースで半年間、関西から日帰りで東京まで通い続けたのだという。

問題は事実なんかじゃない。信じたいという気持ちを壊すようなことはやめてくれませんか……。そんな思いが「神様みたいな存在」という言葉からにじみ出ている気がした。

事実がどうであれ、信じることで何かが変わるかもしれない。そう思う局面は誰にでもある。関西―東京という距離を越えて、四二万円をかけて中央興人院に通った彼女からは、そんな切実な気持ちが感じられた。そして、そうやって必死に努力したという事実がもたらした精神的な変化は確かにあつたようだった。彼女は、電話で話した時にこういった。

「中央興人院にはいろいろと問題があるのかもしれない……。実際、吃音が良くなった気がしているわけでもありません。でも……。知らない人と電話で話すなんていうことは……。考えられなかった自分が……。今こうしてお話できているということと自体が大きな進歩なんです……。」
そう話す彼女にとって、矯正方法

の良し悪しや事実関係は、もはやそのとき問題ではないのかもしれない。根拠などはどうでもいい、ただ「もり」は治るんだと信じさせてほしい、そんな潜在的な思いが、もしかしたらここに通う多くの人たちにはあるのではないか……。

そしてそう思ったとき、それは須郷自身にも通じることなのではないか、という気がした。彼もまた、吃音に翻弄されてきた人間であることは間違いない。その著作によれば、《三歳のときに近所の人のどもる真似をして吃音に》なった。その後、何十年もの間吃音に苦悩しながら生きる中で、例の《生体工学理論》を考え出していったという。だが先の女性は、須郷のこんな側面を記憶している。

「須郷さんは目を合わせて話をしてくれたという記憶は一度もありません。もしかしたら目を見ては話してくいのではないかと思っただけです。まだ吃音が治っていないのかもしれない……。そんな気もしました」

著作にも、《人一倍重症の吃音者だった私が、現にこうして治っている》が《一〇〇パーセント完璧と

は言えません》とあり、須郷は自分の例を挙げながら、吃音は完全に治るものではないと言っている。だがもしかすると彼自身、まだ自分の

吃音をかなり気にしているのではないか。例の電話対応の女性が「先生もしばらく訓練をしないと少し元に戻ることがある」と話していたこと、また須郷が頑なに電話にでなかったこともそんなことを思わせた。やはり治らない、と分かりつつも、それを認めたくないという彼の気持ちの表れが、あの矯正理論と中央興人院なのではないだろうか。彼もまた、吃音が治るといふことをとにかく信じたかったのかもしれない……。

*

吃音の確かな矯正法は、おそらく存在しないのだろう。それは吃音で悩む人自身もつともよく分かっているのかもしれない。しかしそれでも、「もしかして……」という思いは誰もが持ち続ける。吃音はそれほど分らないものであり、だからこそ、ただ言葉がつかまるということだけでは想像もできない多様な影響を人

に与えているのである。

だがその影響は、マイナスな面ばかりではないようにも思える。幼いころから吃音に悩まされていた俳優のブルース・ウィリスは、高校時代に演劇に出演したとき、自分が舞台の上ではどもらないことに気づいたのをきっかけの一つに俳優の道を歩み始めた。また、キャスターの小倉智昭は、小さいころ自分の吃音を笑った人を見返してやろうと、あえて話す仕事を志望したという。

吃音が人にどう影響するか、それはもしかしたら考え次第なのかもしれない。

(敬称略)

(注1) 山口・吃音クリニック研究所 <http://www.intership.ne.jp/~yspeech> より、一部要約。

(注2) 内の引用元はそれぞれ以下のものを資料としています。スギ吃音クリニック <http://www.sugiclinic.com> 中央興人院 案内書「イラストでわかる自分でできる」どもり・赤面「矯正テクニック」、これなら治るともり・赤面・あがり症・自律神経失調症「自分でできる驚異の「須郷式」丹田力矯正法」(ともに須郷昭著・現代書林、引用は著者紹介を含む)

(注3) 中央興人院の案内書からの例(人間)の体内エネルギーは生まれ落ちた時から重力方向になっていて、全ての器官エネルギーが重力方向で下向きのエネルギーでなければなりません)など。

写真撮影/井上治

こんどう ゆうき・ルポライター。

話 走 備 感

中央興人院
まっおん
**吃音・赤面
あがり症、
これで矯正!**

横隔膜の歪みを治す【隔膜バンド】で矯正
案内書ご希望の方はお悩みの内容を書いて上記へ
(切手80円5枚同封)

赤面
吃音
隔膜バンド
で解決
案内書ご希望の方は、お悩みの内容を
書いて、下記へ。
(切手80円5枚同封)

クリニック研究所

あるような空間
たちは銃口を必死に工作
に固定させていたという。

時、海上保安官たちの
かんでいたのは、
う数字だった。

週刊誌には、小さな広告が度々でている。「中央興人院」の場合と「クリニック研究所」の場合があるが、電話番号は同じだ。